

第 34 回 日本ナイル・エチオピア学会学術大会
プログラム・要旨集

The 34th Annual Conference of the Japan Association
for Nilo-Ethiopian Studies

Program and Abstracts



主催 日本ナイル・エチオピア学会
(Japan Association for Nilo-Ethiopian Studies)

日時 2025 年 6 月 28・29 日 (土・日)

於 弘前大学文京キャンパス 人文社会科学部棟 多目的ホール

スケジュール Schedule

【6月27日金曜日】運営幹事会

16:30～18:30 運営幹事会（ハイブリッド開催） Secretariat Meeting

【6月28日土曜日】評議員会・研究発表

11:30～12:30 評議員会 Board of Trustees Meeting

12:00～13:30 大会受付 Registration

14:00～14:10 会長挨拶 Opening Remarks

14:10～16:55 研究発表（第1・第2セッション） 1st & 2nd Session for Presentation

【6月29日日曜日】研究発表・総会

9:00～10:30 大会受付 Registration

9:15～12:00 研究発表（第3・第4セッション） 3rd & 4th Session for Presentation

12:00～13:00 昼休み Lunch

13:00～13:45 総会 General Assembly

13:45～14:05 高島賞授与式 Takashima Prize Award Ceremony

14:15～15:05 研究発表（第5セッション） 5th Session for Presentation

15:15～15:25 最優秀発表賞授与式 Best Presentation Award Ceremony

15:25～15:30 閉会挨拶 Closing Remarks

発表者の方へ

For Presenters

口頭発表の時間は 25 分です。

内訳は発表 20 分、質疑応答 5 分となります。

タイムキーパーは、次のようにベルを鳴らします。

15 分経過：ベル 1 回 予鈴

20 分経過：ベル 2 回 発表終了

25 分経過：ベル 3 回 質疑応答終了

The oral presentation time is 25 minutes.

The breakdown is 20 minutes for presentation and 5 minutes for Q & A.

The timekeeper rings the bell as follows:

15 minutes passed: 1st bell

20 minutes passed: 2-time bell to end the presentation

25 minutes passed: 3-time bell to end Q & A

交通アクセス/ Access

弘前駅から弘前大学文京キャンパスまで

徒歩 約23分

バス 約7分



「小栗山・狼森線」行き時刻表：<https://www.konanbus.com/1398.html>



会場：
弘前大学 文京キャンパス
人文社会科学部 4F 多目的ホール



- 研究発表会場は、弘前大学文京キャンパス人文社会科学部4階多目的ホールです。
人文社会科学部正面玄関からお入りいただき、4階に上がってください。
左手に進み、再び左折。直進してください。
- Research presentation at Tamokuteki hall, 4th floor, Fac. Humanities and Social Sciences, Bunkyo Campus, Hirosaki University
Enter the main entrance of the Faculty of Humanities and Social Sciences and go up to the 4th floor. Go left side and turn left again. Continue straight.

プログラム Program

6月 28日 (土) 14:00-16:55

研究発表 Presentation

14:00-14:10 会長挨拶 Opening Remarks

【第1セッション 1st Session 14:10-15:25】 座長：金子守恵

14:10-14:35

- ①宮地歌織・増田研「ケニア農村部における高齢者のケアと移動について：クワレ・カウンティの事例より」Kaori Miyachi, Ken Masuda, “The Care and Mobility of Older Persons in Rural Kenya: The Case Study of Kwale County”
-

14:35-15:00

- ②相原 進「エチオピア国立劇場のダンサーにおけるキャリア形成とスキル構築に関する世代間比較」(Susumu Aihara, “Intergenerational comparison of career development and skill building among dancers at the Ethiopian National Theatre”)
-

15:00-15:25

- ③元木春伽「エチオピア西南部ジンカ市における椅子の利用と座る姿勢」Haruka Motoki, “Chair Usage and Sitting Postures in Jinka City, Southwestern Ethiopia”
-

15:25-15:40 休憩時間 Break Time

【第2セッション 2nd Session 15:40-16:55】 座長：石川博樹

15:40-16:05

- ④三代川寛子「コプト正教会によるアフリカ宣教—アフリカの連帯？」Hiroko Miyokawa, “Coptic Orthodox Mission in Africa: An African Solidarity?”
-

16:05-16:30

- ⑤中村結友「エチオピア南西部ベンチ社会におけるプロテスタント系キリスト教の拡がり：迫害の語りに焦点を当てて」(Yu Nakamura, “Expansion of Protestant Christianity among the Bench of Southwest Ethiopia: Focusing on their Narratives of Persecution”)
-

16:30-16:55

- ⑥加藤基「ススネヨス期前後のキリスト論の再検討：マズガバ・ハイマノートとマグセフ・アセッタトの比較から」Motoi Kato, “A reconsideration about the Christological debate around the era of King Susānyos: Comparative analysis between Mäzgäbä Haymanot and Magseph Assetat”
-

6月 29日 (日) 9:15-15:30

研究発表 Presentation

【第3セッション 3rd Session 9:15-10:30】 座長：増田 研

9:15-9:40

- ⑦石原美奈子「行政文書を読み解くージンマ大学アーカイヴズ・センター (JUAC) の取り組みー」(Minako Ishihara, “Contextualizing and Deciphering Government Papers: Prospectives for further research at Jimma University Archive Center”)
-

9:40-10:05

- ⑧吉田早悠里「ハイレセラシエ帝政期末期におけるエチオピア南西部の社会変容：W. Lange による1972～1973年の現地調査の記録から」(Sayuri Yoshida, “Social Change in Southwestern Ethiopia in the Late Haile Selassie Era: Based on the Records of W. Lange’ s Fieldwork from 1972 to 1973”)
-

10:05-10:30

- ⑨高橋洋成「ハマル語・バンナ語の後置詞 =sa をめぐって：主題標識としての属格／所有格標識」(Yona Takahashi, “On the Postposition =sa in Hamer and Banna Languages: The Genitive/Possessive Marker as a Topic Marker”)
-

10:30-10:45 休憩時間 Break Time

【第4セッション 4th Session 10:45-12:00】 座長：児玉由佳

10:45-11:10

- ⑩梅屋 潔「『ウガンダ研修』ことはじめ：地域研究教育プログラムの来し方行く末」(Kiyoshi Umeya, “Introduction to the Uganda Training Program: The Past, Present, and Future of Regional Studies and Anthropology Education”)
-

11:10-11:35

- ⑪Ohsoon Yun, “After the Fieldwork: Reimagining Ethiopia through Coffee and Language”
-

11:35-12:00

- ⑫田中 利和「Ethio-Tabiの創造に関する実践的地域研究⑨：ウォリソにおける地下足袋製造の挫折」(Toshikazu Tanaka, “Engaged Area Studies on Ethio-Tabi Creation: Setbacks in Jikatabi Production in Woliso”)
-

12:00-13:00 昼休み Lunch Break

13:00-13:45 総会 General Assembly

13:45-14:05 高島賞授与式、受賞者講演 Takashima Prize Award Ceremony

14:05-14:15 休憩時間 Break Time

【第5セッション 5th Session 14:15-15:05】 座長：吉田早悠里

14:15-14:40

- ⑬石川博樹「ダボとアンバシャ：エチオピアのキリスト教徒の2種の小麦パンに関する歴史学研究」(Hiroki Ishikawa, “Dabo and Ambasha: A Historical Study on Two Types of Wheat Bread of the Ethiopian Christians”)
-

14:40-15:05

- ⑭遠藤仁・渡邊三津子・大場千景「エチオピア・オロミア州の中世サカテ遺跡の構成要素の検討—現地踏査および衛星画像分析から探る遺跡概要」(Hitoshi Endo, Mitsuko Watanabe, Chikage Oba, “Research on the Components of the Medieval Sakate site in the Oromia Region, Ethiopia: Overview of the site through field survey and satellite image analysis”)
-

15:05-15:15 最優秀発表賞投票・集計 Voting and Counting for Best Presentation Award

15:15-15:25 最優秀発表賞授与式 Best Presentation Award Ceremony

15:25-15:30 閉会挨拶 Closing Remarks

発表要旨 Abstracts

ケニア農村部における高齢者のケアと移動について：クワレ・カウンティの事例より
宮地歌織（高知大学）・増田研（長崎大学）

The Care and Mobility of Older Persons in Rural Kenya: The Case Study of Kwale County

Kaori MIYACHI (Kochi University), Ken MASUDA (Nagasaki University)

世界で高齢化の波が押し寄せており、アフリカも例外ではない。近年の都市化や近代化に伴い、若者の都市への人口流出、さらには農村の過疎化という懸念がある。そして、未だ医療や介護の制度が整わない中での高齢化は、様々な社会問題を引き起こす可能性がある。世界の高齢化に関して 2002 年に開催された第 2 回高齢者問題世界会議では「マドリード国際行動計画（the Madrid International Plan of Action on Aging: MIPAA）」が採択された。ケニアでも MIPAA をもとに政策が展開され、2018 年から 70 歳以上の高齢者が受給できる現金給付制度（*Inua Jamii*）も開始されている。しかしアフリカの高齢化についての調査研究は少なく、日常的な高齢者の生活、ケア、医療についての実態はまだ明らかではない。

ケニアでは 2020 年時点での高齢者率は 4.2%であり、2050 年には 10.3%になると予想されている。今後のケニアでの高齢化にどう対応するのか。本研究では、ケニアの農村部の高齢者について 2016 年から継続している質的調査、および 2022 年に行った量的調査をもとに、（1）現在の高齢者の生活や健康についての状況を示し、その上で、（2）ケアと移動について着目し、さらにジェンダーの視点からの分析を行う。

本研究ではケニア西部のインド洋海岸部に位置するクワレ・カウンティを対象としている。クワレでは、長崎大学熱帯医学研究所とケニア中央医学研究所（KEMRI）による「健康と人口の動態追跡調査システム（Health and Demographic Surveillance System: HDSS）」が構築されている。本研究では HDSS を活用し、2016 年よりクワレ内 3 地区で高齢者女性 30 名に継続してインタビュー等を実施しており、さらに 2022 年に約 5,000 名を対象とした高齢者に関する調査（以下、Wazee Surveillance: WS）を行った。

（1）高齢者の生活と健康

一般的には、ケニアの高齢者は大家族によって適切なケアを受けていると考えられている。クワレの HDSS のデータからは、約 60%以上の高齢者は 6 名以上の世帯に同居していることが明らかになっており、2022 年の WS の結果によれば、調査対象者のうち 60 歳以上（1,782 名）の独居の割合は 5%とまだ少ない。また、調査中には、同じコンパウンド内ではなくても近隣にいる息子やその家族、あるいは婚出した娘なども、近所に住んでいれば、親のもとに顔を出す様子も見られた。

一方で、高齢者女性を対象としたインタビュー調査では、独居女性で困難を抱えている人もいた。子どもは複数いるが十分なサポートをしてもらえない、病気になっても近くに医療施設が無く受診ができない（交通インフラやコストの問題、同行する家族がいない、など）、

村の公的医療機関では高齢者に対する医療ケアが十分ではない、などのケースがあった。寝たきりや認知症の高齢者がいる家庭では、高齢者ケアに対する家族（特に女性）への負担が大きいことも見えてきた。いわゆる「老人ホーム」のような高齢者関係の施設は、モンバサやナイロビなどの大都市では、有料で運営されたり、宗教団体による高齢者・障がい者の施設として運営されていた。また都市部では看護師による在宅訪問サービスも展開されている。しかし農村では、年老いた親の世話は家族によるものがほとんどであった。

(2) ケアと移動およびジェンダーの視点

この地域はイスラム教徒が多く、複婚の割合も高い。ケアという観点では、男性高齢者は妻やその他の家族にケアを受ける場合が多い。WS のデータでは、寡婦が 33.7%で男性の 4.6%と比較するとかなり高い。男性でも、病気の程度やケアを行う家族の都合で移動することもあるが、質的調査からは、女性、特に寡婦の場合は病気やフレイル状態になると、ケアを求めて自分の姉妹や娘の場所に移動する傾向にあることが明らかになった。認知症の高齢の親は、子ども達の家々を移動し、家族が負担を分かち合うケースもあった。また寡婦の場合で、閉経や夫の死亡に伴い、夫のコンパウンドを出て行かざるを得ないケースもあった。女性の場合、世界的にも高齢になることでより貧困化することが課題となっており、ケニア農村でもそのような事例が散見された。

ケニアでは現在、家族介護が主体であるが、高齢化や過疎化、そして家族の在り方も変化していく中で、ケアをめぐる状況も自ずと変化していくと思われる。高齢者政策が不十分なケニアで、将来的にどのような支援システムが可能なのか。家族支援以外の可能性として、医療や介護制度の構築などの検討が必要である。

参考文献

Cohen, B., and J. Menken (eds.) 2006 *Aging in sub-Saharan Africa: Recommendations for Further Research*, The National Academies Press.

Kaneko, S. (et al) 2012 “Health and Demographic Surveillance System in the Western and Coastal Areas of Kenya: An Infrastructure for Epidemiologic Studies in Africa.” *Journal of Epidemiology* 22 (2012): 276 - 285.

UNFPA 2020 *Rapid Review of Healthy Ageing and Long-Term Care Systems in East and Southern Africa: Country Summary Report-Kenya*.

宮地歌織 2017 「ケニア農村部における女性高齢者のケアに関する一考察」『地域ケアリング』19 (13) , pp.76-81.

エチオピア国立劇場のダンサーにおけるキャリア形成とスキル構築に関する世代間比較

相原 進（京都大学）

Intergenerational comparison of career development and skill building among dancers at the Ethiopian National Theatre

AIHARA Susumu (Kyoto University)

本発表の目的は、エチオピア国立劇場におけるプロダンサーのキャリア形成とスキル構築について、世代間比較を通じてそれらの機会の拡がり进行を明らかにすることである。

エチオピア国立劇場では、伝統音楽部門がコミュニティなどで保存・継承されている伝統的なダンスや音楽の上演に関わっている。この部門には 2020 年までは男性 8 名、女性 7 名の計 15 名が所属していた。ダンサーの新規採用は 2016 年を最後に途絶えていたものの、新型コロナによるレイオフなどにより既存のメンバーが 5 名脱退した。既存メンバーの離脱を受け、年長の女性メンバーがダンサーを志望する若者に向け、エチオピア各地でのワークショップを通じてオーディションの受験を促す活動を始めた。その結果、2024 年に開催したオーディションや公募を経て、見習い（フリーサービスコース）に 8 名が新規加入した。本発表では、2016 年までに加入していた世代を「シニア世代」、2024 年のオーディションで見習いとなった世代を「新世代」と呼ぶことにする。新世代は男性 4 名、女性 4 名で平均年齢は 21.1 歳である。シニア世代でも見習いから正規メンバーになった者は 6 名おり、国立劇場のダンサーになる上でフリーサービスコースは有効なキャリアパスと機能していると言える。

発表者は 2022 年度のナイルエチオピア学会大会において、2017 年から継続してきたシニア世代 15 名への聞き取りをもとに、彼らのキャリア形成とスキル構築に関する報告をおこなった。今回は当時のシニア世代への聞き取りの結果と、2025 年 3 月に実施した新世代のメンバー 8 名への聞き取りとを対比する。聞き取りでは、経歴、子どもの頃の学校・地域社会・教会でのダンスの経験、アマチュア時代およびプロになってからのダンスの経験と学習方法についての質問を軸とした半構造化インタビューをおこなった。

エチオピア国立劇場のダンスには「地域・民族ごとに演目を立てる」「各演目に含まれる基本的な動作の組み合わせで演目を制作する」という特徴がある。シニアと新世代に共通して見出されたキャリア形成の特徴として、プロのダンサーになるためには優れた指導者と運良く出会う必要があり、指導者のもとで、各演目に含まれる基本的な動作を 1 つずつ学ぶことでダンスを習得していた事が挙げられる。

一方、シニア世代と新世代とで違いが現れた点が 4 つあった。1 つめは、出自と文化の体験に関して、新世代では複数の民族にルーツを持つ傾向が強くなった一方で、ダンスの体験については正月やメスケルなどで演じられるダンス（ホイヤホイエ、アベバイオシュなど）

の体験はあるものの、民族固有のイベント（イレチャ祭りなど）への参加経験は少なかった。ということがわかった。

2 つめは、ミニメディア（音楽やダンスを取り入れた部活動）などの学校教育の場において、シニア世代よりも幅広い地域・民族のダンスを学ぶようになったことが挙げられる。シニア世代では2名のみミニメディアに所属していたのに対し、新世代では7名がミニメディアに所属していた。シニア世代はミニメディアでダンスや楽器を少し経験した程度であったが、新世代の場合、現在の国立劇場やダンスを鑑賞できるレストランの主要演目がほぼ網羅されていた。国立劇場のオーディションは、その場で指定された演目（民族・地域）のダンスの特定の動作を演じることが求められるため、各演目に関する幅広い知識が求められることになる。この点において、ミニメディアでの幅広い経験がアマチュアグループや見習いへの採用にプラスに働いた可能性がある。

3 つめは、新世代は専門学校や大学などで専門知識を学びながら、アマチュアでの活動を継続している点である。シニア世代はアマチュアとしての活動を経て、安い給与であってもプロとして活動しつつ、良い給与や待遇を求めて何度も職場を変えながら国立劇場やトップクラスのレストランなどで職を得ることに至っていた。しかし新世代の場合、アマチュアグループでダンスを学んだ点は同様であるが、大学や専門学校に通いながら、ダンス以外のスキルも身につけつつ国立劇場の見習いになった点に違いがある。彼らは国立劇場に正規採用されなかった場合、学校で学んだスキルを活かして職を得ることを見据えていた。シニア世代は国立劇場への所属後もレストランで兼業している場合が多いが、新世代はレストランなどで働いているものはおらず、レストランで働きたい意向を持っている者もいなかった。

4 つめは、新世代は全員が教会での音楽を経験していたことが挙げられる。ただ、ダンスの技術と教会での経験が直接結びついていると考えている者がいなかったため、この点についてはさらなる検討が必要である。

また、新世代では所属したアマチュアダンスグループに偏りがあり、8名中3名が同じグループの所属であった。シニア世代においてもプロとして成功するためには良いグループ、良い指導者との出会いが重要であり、それは運に委ねられていると言って良い状況であった。新世代のメンバーにおいてもアマチュアグループの所属に偏りがあった点において、キャリア形成やスキル構築には運次第の部分がまだ残されていると言えるかもしれない。しかしその一方で、シニア世代によるワークショップの開催やオーディションへの勧誘などのオープンな働きかけにより、若い世代ではより早い時期に才能を発掘され、国立劇場でのキャリア形成とスキル構築を始められる可能性が見出された。

【参考文献】

相原進, 2021, 『ダンス・イン・エチオピアー伝統的ダンスにおけるダンサーたちの創造と実践ー』 松香堂書店.

エチオピア西南部ジンカ市における椅子の利用と座る姿勢

元木春伽（京都大学）

Chair Usage and Sitting Postures in Jinka City, Southwestern Ethiopia

Haruka Motoki (Kyoto University)

本発表の目的は、エチオピア西南部ジンカ市に暮らすアリの人々が利用する椅子に着目し、特に女性が家事労働を行う際の座る姿勢と空間利用の特徴を明らかにすることである。

発表者は、ジンカ市 T 地区の 16 世帯を主な対象として、117 日間（2023 年 10 月 10 日～11 月 27 日、2024 年 9 月 2 日～11 月 8 日）現地調査を行った。16 世帯が日常生活で使っている空間として母屋、台所、中庭に注目し、それぞれの空間において、世帯の女性による椅子の使い方と彼女たちの作業姿勢について、観察および聞き取り調査を行った。

調査の結果、以下の 4 点が明らかになった。1. 調査した 16 世帯を対象に、計 149 脚の椅子の形態および椅子の高さを記録・検討した結果、多くの世帯が 5 種類の椅子を利用していた。2. 椅子の高さによって携帯性が異なり、それに応じて利用される場所も異なっていた。30cm 以下の高さの椅子は携帯性が高い傾向があり、なかでも 3 本脚の椅子（バルチマ）は、すべての生活空間で利用されていた。3. 16 世帯計 27 人の女性を対象にし、家事労働における作業内容とその際の作業姿勢を観察・記録したところ、作業内容に応じて 6 種類の姿勢をとっていた（写真 1-6）。4. それぞれの家事労働には一定の作業姿勢がみられた一方で、同じ作業であっても 10 代の女性と 20～30 代の女性では異なる姿勢をとっていた。例えば、10 代の女性たちは昼食の準備に携わっていたことが多く、その際にしゃがむ姿勢で作業をしていたが、20～30 代の女性は地面に座っていた。同じ作業でも、世代によって作業姿勢が異なる可能性があることが示唆された。

以上の調査結果から、ジンカ市に暮らすアリの人々は、椅子の形態的特徴や性質を把握したうえで、携帯性の高い椅子を場所にに応じて利用していたことが明らかになった。彼女たちは、複数の姿勢を取りながら家事労働を行っているが、それと同時に子育てをしていた女性たちに関しては、子どもの目線と合わせるために地面やかなり低い座面の椅子に座ったり、しゃがんだりして家事労働を行う傾向が強かった。さらに、調理を行うときには、利用していたかまどの高さによって姿勢が変化しており、生活空間が人の姿勢を制約していることも示唆された。

今後は、ジンカ市に加えて、周辺の農村部に居住するアリ人も対象とし、休息・社交・儀礼といった場面における人々の姿勢と椅子の利用に関する事例を増やし、椅子の形態や携帯性が人々の姿勢や空間利用に与える影響について検討を深めていく。



写真1 バルチマに座って調理をする女性
撮影日：2024年9月9日



写真2 シャガんで調理器具を洗う女性
撮影日：2024年9月16日



写真3 木製の服入れの上で胡坐をかいている女性
撮影日：2024年10月24日



写真4 足を伸ばして穀物のゴミを飛ばす女性
撮影日：2024年9月17日



写真5 柄の短いほうきを使って掃除をする女性
撮影日：2024年10月10日



写真6 両膝を地面について生地を練る女性
撮影日：2024年10月29日

写真1-6 撮影場所：ジンカ市T地区

コプト正教会のアフリカ宣教：アフリカの連帯？

三代川寛子（京都大学）

Coptic Orthodox Mission in Africa: An African Solidarity?

Hiroko Miyokawa (Kyoto University)

エジプトのコプト正教会は、エジプトを主たる地理的拠点としてきたが、その長い歴史の中には、ヌビアやエチオピアなど東アフリカの広域に一定の影響力を保持していた時期があった。ヌビアは15世紀ごろにはイスラーム化したためエジプトのコプト教会との関係は途絶えた。エチオピアの教会については、20世紀初頭からエジプトのコプト正教会の影響下からの離脱を目指すようになり、最終的には1959年にエチオピア・テワヒド教会として独立した。これにより、コプト正教会はエチオピアの教会に対する司教任命権を放棄し、教会行政上、両教会は相互に独立し対等な関係になった。これらのことから、エジプトのコプト正教会は、少なくとも教会の管轄地域の観点では、20世紀半ばで一旦サブサハラのアフリカとの関係を失ったと言えそうである。しかし、1970年代になると、コプト正教会はサブサハラのアフリカ諸国への宣教活動を開始し、少数ながらも一定数の信徒を獲得するようになった。

本研究発表では、この1970年代以降のコプト正教会によるサブサハラのアフリカ諸国への宣教活動、特にケニアでの宣教活動の事例を通して、(1)人と思想・制度の移動、(2)地域概念とエスニシティがもたらす連帯と分断の状況を明らかにし、北アフリカとサブサハラの関係を考察していきたい。主たる研究方法は文献調査であるが、2023年2月にケニアのナイロビとキスムで行った現地調査の成果も反映させた。

上述のように、コプト正教会はエジプトを主たる地理的拠点としてきた歴史があり、前近代においてはイスラーム諸王朝の支配下にあったことから、対外的な宣教活動を行うことは非常に難しい環境にあった。その状況は近代化の過程で信教の自由がエジプトの憲法で保障されるようになった後も大きく変わることはなかった。一方で、エジプトには19世紀以降、英国聖公会宣教協会およびアメリカの長老派の宣教団が派遣されてくるようになり、彼らは改宗に対する抵抗が大きいムスリムよりもコプト正教会の信徒たちを宣教活動の主たる対象とした。実際にこれらの教派に改宗したコプトは少数にとどまったものの、欧米からの宣教師たちの活動を契機として、コプト正教会内部で多岐にわたる教会改革が始まった。

こうした教会改革の中でもよく知られているのは日曜学校運動である。これは、助祭長ハビーブ・ギルギス（Archdeacon Ḥabīb Girgis, 1876-1951、2013年に列聖）が開始したもので、その名が示唆するようにプロテスタントの宣教師たちによる活動から影響を受けたものであった。このコプト正教会の日曜学校運動は、宗教復興と社会改革を同時に目指すもので、エジプト国内の開発が遅れた地域において、貧困、無知、病気、犯罪の撲滅を目指して識字教育や職業教育などを行うとともに、都市部のコプトの若者向けにスカウト運動を行ったり、エジプトの初期キリスト教の歴史を振り返り、宗教伝統を復興することに精力的に取り組ん

だりするなど、文化活動にも積極的であった。コプト正教会のサブサハラにおけるアフリカ宣教は、こうした日曜学校の活動に従事した経験を有するアントゥニユース・マルクス司教（Bishop Antūniyūs Marqus, 1936-）らが中心となって行われた。

コプト正教会が 1970 年代ごろからサブサハラのアフリカにおいて宣教活動を開始する契機となったのは、コプト正教会がエキュメニカル運動に参加するようになり、国際的な場でキリスト教各教派の代表者らと交流が進む中で、ケニアのキリスト教会の一部が「コプト」を名乗っているとの情報がもたらされたことであった。これらのケニアの「コプト」とは、ナセル大統領によって一時エジプトに匿われていたケニアの独立運動活動家らがエジプト滞在中にコプト正教会の存在を知り、それが広まって、ケニアの教会指導者の一部がコプト正教会の了承なしに「コプト」と名乗り始めたものであった。これらのケニアの「コプト」がコプト正教会に注目したのは、彼らが同教会を、非白人による、植民地主義および人種差別に加担していない、アフリカの教会とみなしたからであった。彼らにとってコプトを名乗ることは、1950～60 年代ごろのアフリカ諸国の独立運動の時期にアフリカ独立教会（the African Independent Churches）が模索したような、アフリカらしさとキリスト教の信仰の両立を目指す方向性に合致していたのである。

実際のコプト正教会による宣教活動は、上述のように、エジプトにおける日曜学校運動の影響を受けたものであった。マルクス司教らはケニア各地に病院や孤児院を建設し、奨学金制度やスポーツによる若者育成事業を推進し、職業教育活動なども行った。ケニアには現在 11 のコプト正教会があり、ケニア人の聖職者養成のための神学校が設立され、現在では 15 名のケニア人司祭がケニアにおけるコプト正教会の司牧活動に従事している。ケニアを拠点に周辺のアフリカ諸国でも宣教活動が行われ、コプト正教会が複数建てられている。

このように、エジプトから派遣された宣教師らは、エジプトでの日曜学校の経験をケニアおよびその周辺諸国にも適用していったのであるが、コプトの日曜学校運動はそもそもエジプトにやってきたプロテスタントの宣教師たちの活動に大きく影響を受けたものであった。そのため、2023 年 2 月にケニアで行った現地調査では、コプト正教会によるアフリカ宣教活動が掲げる理念や実際の活動内容に関して、西洋の教会によるものと似通った印象を受けた。一方、コプトを特徴づけるはずの「アフリカらしさ」に関しては、コプト正教会はアフリカの教会という自己認識を明確に示してはおらず、むしろエジプト人宣教師や聖職者らとケニア人の信徒の間にエスニシティの違いから来る分断があるように見受けられた。コプト正教会がこれまでエジプトに根差したエジプト人の教会であったことは確かだが、20 世紀後半以降、宣教活動などを通して非エジプト人の信徒を獲得する中、非エジプト人信徒をどう教会組織の中に包摂するかが今後コプト正教会の課題になっていくものと思われる。

エチオピア南西部ベンチ社会におけるプロテスタント系キリスト教の拡がり：迫害の語りに焦点を当てて

中村結友（南山大学大学院人間文化研究科）

Expansion of Protestant Christianity among the Bench of Southwest Ethiopia: Focusing on their Narratives of Persecution

Yu Nakamura (Nanzan University, Graduate School of Humanities)

エチオピア南西部のベンチ社会では、現在プロテスタント系キリスト教の信徒が増加している。それは、1951年、アメリカの長老派宣教師のチャールズ・ハスペルズらがベンチを訪れたことに端を発する。ベンチ社会でキリスト教の布教を始めた宣教師たちは、自分たちの生活空間を整えるために水道や電気を整備し、病院や学校を建設した。ハスペルズらは、ウォッレガ地方で宣教活動に従事していたオロモ宣教師ギダーダ・ソレン牧師（Gidada Solen）を招きベンチの宣教に当たらせた。こうした外国人やエチオピア人の宣教師たちの働きによって、ベンチ社会にキリスト教が浸透していった。しかし、デルグ政権下でプロテスタント信徒は苦境に立たされた。

デルグ政権下では、プロテスタント信徒に対して迫害が行われたことはノルウェー人実践神学者エイデ（Oyvind M Eide）が指摘しているが、実際にどのような迫害が行われ、人々がそれをどのように受け止め、それが信仰にどのような影響を与えたのかについては、明らかにされてこなかった。ベンチのプロテスタントは1979年から1989年の10年間「帝国主義の飼い犬」と呼ばれて迫害を受けたが、迫害の詳細についてはこれまで明らかにされてこなかった。本発表では、ベンチ人のGetahun Yosef牧師によって書かれた自費出版の書籍である『ベンチとマジ周辺における福音の光と払った犠牲』をもとにその一部を紹介する。

また、発表者は2023年8～9月、2024年8～10月にかけてベンチ社会において現地調査を行い、そこで行ったインタビューやアマン・ベテル・メカーネイエス教会（Aman Betel Mekane Yesus Church）での参与観察をもとにベンチの人々の間にキリスト教がいかに浸透しているのかについて報告する。信徒の改宗動機や教会の歴史に関する聞き取りから、EPRDF政権成立直後の不安定な時期に、デルグ政権下で抑圧されていたベンチの地元領主（*tyat*）や霊媒師（*kanans*）の一部が一時的に権力を取り戻し、プロテスタント信徒を攻撃したことも明らかになった。以上の研究成果をもとに、今後の研究の課題と展望を述べる。

本研究は、科研費補助金（基盤（B））「エチオピアにおける郷土史・地方史の体系的収集・分析を通じた多元的歴史認識の解明」（研究代表者：石原美奈子、課題番号23K20504）の一環として行われた。

ススネヨス期前後のキリスト論の再検討：マズガバ・ハイマノートとマグセフ・アセッタトの比較から

加藤 基(東京大学)

A reconsideration about the Christological debate around the era of King Susānyos:

Comparative analysis between Mäzgäbä Haymanot and Magseph Assetat

Kato Motoi (The University of Tokyo)

本発表は、ススネヨス(ሱሱኑዮስ, ca.1571-1632)期に、エチオピアの正教会の学者たちとイエズス会士たちの間で行われたキリストの性質をめぐる論争を再検討するものである。エチオピア正教会は、キリスト論において非カルケドン派に位置するとしばしば言及される。非カルケドン派とは、451年に東ローマの皇帝マルキアヌスによって召集されたカルケドン公会議にて採択された、キリストの中にある人性と神性がそれぞれ完全な形で別個に存在すると表明するカルケドン信条を認めない教会を指す。

カルケドン信条を認めるローマ教会と、それを認めないエチオピア正教会との差異は、16世紀から17世紀にかけてエチオピアで活動したイエズス会士たちによって注目された。イエズス会士たちは、自身に興味を持ったエチオピアの貴族たちに、ローマカトリックの信仰を教え、エチオピア正教会の教えを間違ったものであると批判した。さらに、時には王や貴族たちの前で、エチオピア正教会の修道士との間で公開討論を行なった。

これまでの研究において、これらのキリスト論をめぐる論争は知的階級を中心になされていたと考えられてきた。論争の中心は、キリスト論をめぐる（しばしば難解な）聖典や教父たちの言葉の解釈をめぐるものであった。したがって、エチオピアにおける神学的思想、もしくはそれに基づく政治的な対立の発達の遠因となったとは考えられるが、社会的な影響力は、カトリック典礼の強制などと比べると限定的であると論じられてきた。

本発表は、上記のような見方に対して、イエズス会士によるエチオピア古典語の文書の検討を通して再考を試みるものである。史料としては、1614/16年にイエズス会士アントニオ・フェルナンデスが記した、*Magseph Assetat* (መቼሆናት ሐሰታት, 過ちの処罰) と、その主な論争対象の書物である *Mazgäbä Haymanot* (መዝገበ ሃይማኖት, 信仰の宝庫) を用いる。両者の対応する記述を比較することで、両者が何を論じようとしていたのか、そしてそこにはどのような差異が生まれたのかを明らかにする。

上記の比較を通じて、以下の点を研究成果として述べる。まず、エチオピア正教会側の議論は、カルケドン公会議のキリスト論を直接の対象にするのではなく、14、15世紀における宗教的、政治的論争の影響を強く受けている。したがって、聖典解釈的なキリスト論であると同時に、政治的、または社会実践的な価値づけが、エチオピア正教会のキリスト論には先んじて行われていた。イエズス会士たちはそれらの用語を用いて議論をしていたため、その構図の中に位置付けられていた可能性がある。もう一点は、イエズス会士たちの議論とエチ

オピア正教会側の議論は、重点が少し異なっている。前者は、**Haymanot**/信仰に重点を置くのに対して、後者は **lämäd**/慣習・伝統に重点を置いている。これらの二点は、イエズス会士たちによって持ち込まれた知的な神学論争としてのみ、当時のキリスト論を捉えることを再考する必要性を提示する。

行政文書を読み解くージンマ大学アーカイヴズ・センター（JUAC）の取り組みー 石原美奈子（南山大学）

Contextualizing and Deciphering Government Papers: Prospectives for further research at Jimma University Archive Center

Minako Ishihara (Nanzan University)

エチオピアにおいて行政文書は国家を形作る重要な媒体である。行政文書は、国家を構成する様々な機関の内外を結び付け、非公式なやり取りを公式化する道具でもある。そのような「道具」としての役割を終えた行政文書は、当該機関に一定期間保管された後、廃棄される。行政文書は、人口増加と行政機能の細分化・多角化にともない増産されるものであり、保管できる空間は限られているからである。

ジンマ大学の元歴史学者 Ketebo Ensene 氏は、そうした廃棄対象となった行政文書を大学に収集した。県庁、市役所、農業局、保健局、教育局の文書が収集の対象となり、資料は麻袋に詰め込まれて、ジンマ大学に新たに開設されたアーカイヴ・センターに保管されることになった。その量は、2019 年に仏歴史人類学者 Eloi Ficquet 氏が訪問時は 80 個ほどであったという。その後、Ficquet 氏らがフランス政府の援助を受けて公文書アーカイヴを構築しアーキビストを養成するプロジェクトがアジスアベバで実施され、それにジンマ大学の教職員有志も参加した。訓練を受けた事務職員が中心になって、麻袋に入っていた文書を一つ一つ清掃・修復し、新しいフォルダとファイルに整理し、本棚に並べるという作業が開始された。

2024 年 8 月に私たちが JUAC を訪れた時には、麻袋はすべて開封され、新しいファイルに綴じられた文書が本棚に並べられ、本棚不足のため一部はテーブルに横積みになっていた。また 2024 年 12 月訪問時には、カタログ作成の段階に入っていた。

本発表では、行政文書のうち、ジンマ市役所に所蔵されていた文書の一部「カファ州聖職者事務所ショワ・バルの聖ミカエル教会入植者関連、1943-70(EC)」というフォルダを紹介する。ショワ・バル（ショワ門）は、ジンマ市の北東に位置する、ショワ方面に通じる幹線道路沿いにある地区で、そこに 1946～55 年にカファ州の州知事であったデジャズマッチ・メスフィン・シレシが広大な土地を保有していた。その一角に建てられた聖ミカエル教会に関する文書がこのフォルダに集められている。帝政期からデルグ政権期にかけて、聖ミカエル教会をめぐる、行政機関においてどのようなやり取りがなされたのかを文書から読み取ると同時に、行政機関や個人の間関係性や、社会における行政文書の意味について考察する。

ハイレセラシエ帝政期末期におけるエチオピア南西部の社会変容：W.Lange による 1972～1973 年の現地調査の記録から

吉田早悠里（名古屋大学）

Social Change in Southwestern Ethiopia in the Late Haile Selassie Era: Based on the Records of W.Lange's Fieldwork from 1972 to 1973

YOSHIDA Sayuri (Nagoya University)

本発表は、1972 年 10 月から 1973 年 8 月にかけてエチオピア南西部で調査を実施した Werner Jürgen Lange による現地調査の記録をもとに、ハイレセラシエ帝政期末期のエチオピア南西部の様相について報告するものである。

Lange は、1946 年 12 月にドイツで生まれ、1952 年に家族とともに 6 歳でアメリカ合衆国に渡った。オハイオ州立大学で学んだ後、ドイツのゲーテ大学に留学した。当時、同大学の民族学の教授であり、フロベニウス研究所の所長でもあった Eike Haberland のもとで民族学／文化人類学とエチオピア研究を学んだ。そして、フロベニウス研究所が 1972 年から 1974 年にかけて行ったエチオピア第 4 次調査のメンバーの一人として、Eike Haberland、Ulrich Braukämper、Siegfried Seyfarth とともにエチオピアに赴いた。Lange は、ゴンガ、なかでもシェカの調査を担当している。1975 年にギミラに関する博士論文を提出し、アメリカ合衆国に戻ってケント州立大学で社会学の教授を務めた。その後、1994 年にはアッシュランド神学校で博士号を取得し、1996 年からは聖職者となって教会で牧師を 10 年間務めた経歴の持ち主である。

Lange の代表的な著作に、博士論文『Gimira (remnants of a vanishing culture)』（1975 年）や、『History of the Southern Gonga (southwestern Ethiopia)』（1982 年）がある。前者の『Gimira』は、ギミラ、ナオ、チャラ、シェ、ベンチの 5 民族についてその歴史や社会構造、政治構造、宗教などを明らかにしている。また、後者の著作では、シェカ、ボシャ、ヒンナロ、カファの 4 民族を扱っている。

Lange がエチオピアを訪問したのは 1972 年 9 月 7 日であり、南西部で調査を開始したのは 10 月に入ってからであった。まず、イルバーボル州ゴレからモチャ県マシャにラバで向かい、マシャとその近隣で調査を行っている。10 月末にカファ県北部のゲシャ郡を訪問、11 月はモチャ県マシャとカファ県ゲシャ郡を行き来する形で調査をしている。その後、12 月はジンマ、アディスアベバに滞在し、1973 年 1 月にマシャに戻って、シェカの調査をしている。2 月に入り、カファ県中部のギンボ郡で調査を行い、3 月にカファ県南部でナオの調査を実施した。4 月には現在のベンチ・シェコ県にてシェについての調査をし、5 月上旬にカファ県ボンガにてカファの在来宗教の指導者と面会している。5 月半ばにジンマにて国内博覧会を見学したほか、ジレンにてジンマ王国の王の子孫と面会している。6 月には、再度、ジンマ王の子孫、ボンガでは在来宗教の指導者から聞き取りをし、7 月から現在のオロミア州ジンマ県アセン

ダボの南のあたりでボシャについての調査を行った。8月上旬にアデイスアベバに戻り、帰国の途についた。

Lange は、アデイスアベバにて妻 Roxanna と結婚し、妻も調査に随行した。また、Lange は、助手兼通訳として現地の男性を雇用して調査を実施している。1名はハイレセラシエ I 世大学（現アデイスアベバ大学）で募集したシェカ出身の男子学生であり、1973 年 4 月にその男性との雇用関係を解消した後は、現在のベンチ・シェコ県での調査時に道中で知り合ったシェ出身の男性と調査を行っている。後者の男性は、もともとは大学生であったが、学生運動に身を投じ、処罰を恐れて出身地に戻って身を隠していたところ、Lange と出会って助手となった。なお、Lange は、この男性が名乗っていたのは偽名であった可能性が極めて高いと語っており、こうしたことから当時の政治的状況が伺える。

1972 年から 1973 年は、まさにハイレセラシエ帝政期の末期にあたる。その後、1974 年に各地で暴動が生じるとともに、軍部による革命が起き、ハイレセラシエが殺害されてデルグ政権を迎えた。1974 年から 1991 年までのデルグ政権において、エチオピアでは外国人の滞在が厳しく制限された。そして、1991 年からは EPRDF 政権のもとで民主化と経済の自由化が進められるとともに、エチオピアの文化、宗教、社会は海外により開かれていくことになった。Lange の現地調査は、まさに革命の足音が近づく、時代のうねりの最中で行われたものである。

本発表では、Lange が現地調査時に記した日記やフィールドノートの記録をもとに、当時のエチオピア南西部におけるアムハラと各民族の関係や、県や郡における行政官や警察官の振る舞い、一般の人々の民族意識などについてみていく。そして、ハイレセラシエ帝政期末期のエチオピア南西部における統治のあり方と各民族がおかれていた状況について検討したい。

なお、本発表は、科学研究費補助金「デジタル人文学が拓くアフリカ史研究の新地平：エチオピア・カファ地方をモデルとして」（研究代表者：吉田早悠里、23K20501）の研究の一環として、2024 年 9 月 22 日から 9 月 29 日にアメリカ合衆国オハイオ州で行った調査成果の一部である。

文献

Lange, Werner J. 1975 *Gimira (remnants of a vanishing culture)*, Ph.D. dissertation, the Johann Wolfgang von Goethe-Universität, Frankfurt-am-Main.

Lange, Werner J. 1982 *History of the Southern Gonga (southwestern Ethiopia)*, Stuttgart: Steiner Franz Verlag.

ハマル語・バンナ語の後置詞 *=sa* をめぐって：主題標識としての属格/所有格標識
高橋洋成（東京外国語大学）

On the Postposition *=sa* in Hamar and Banna Languages: The Genitive/Possessive Marker as a Topic Marker

Yona TAKAHASHI (Tokyo University of Foreign Studies)

ハマル語とバンナ語は南オモ諸語（エチオピア南西部）に属し、両者は言語的特徴において連続している。ただし、バンナ語は語彙の一部を、同じく南オモ諸語に属するアリ語と共有しており、これによって話者はハマル語と区別している。一方で、ハマル語とバンナ語はほぼ共通の後置詞体系を有しており、本発表はそこから後置詞 *=sa* を取り上げる。

後置詞 *=sa* は属格「～の」（e.g. “*q’aski-a=sa mete*” 「雄犬の頭」）、所有格「～のもの」（e.g. “*mete ka q’aski-a=sa=ne*” 「この頭は雄犬のだ」）を表すと捉えられてきた（高橋 2010: 141–142; Petrollino 2016: 104–105）。加えて次の例 (1)、(2) のように「～に関すること」を意味しうることを高橋 (2011: 125) が指摘している。

- (1) *jer-a aga =sa i-na gojti gi:m-a.*
thing-M this.M =GEN 1SG-DAT way.Ø tell.IMPV.SG
「このことの道を（＝このことに関して）私に教えてほしい。」

（高橋 2011: 125 例 106、ハマル語）

- (2) *i =sa har ki kirb-e.*
1SG =GEN who 3M dance.IMPV-PL
「私のものを（＝私のために）誰か踊ってほしい。」

（高橋 2010: 141 例 23、ハマル語）

上記の例 (1)、(2) のような *=sa* の用例についてはこれまで議論が不十分であった。そこで、本発表では *=sa* の性質を次の (A)～(C) のように整理する。

(A) バンナ語の属格／所有格表現には後置詞 *=sa* を用いるもの (e.g. ‘*ki=sa mete*’ 「彼の頭」)、ならびに代名詞と融合した所有形容詞を用いるもの (‘*mete-no kinno*’ 「彼の頭」) がある。

(B) 所有形容詞による名詞句はたいてい結合的なイントネーションを持つのに対し、後置詞 *=sa* による名詞句はしばしば分離的イントネーションを持つ。次の例 (3) は通常（コンマで表しているように）後置詞句 *niʔ-a-n=s* の後に小休止が置かれる。

- (3) *sire ma: =te niʔ-a-n =sa, q’a:mi q’ole.*
childbirth(?).Ø woman.F =LOC come.INF-PFV-DEP =GEN ear.Ø exist.not
「臨月が来た女の（＝女には）耳がない。」（バンナ語）

ここで (A)、(B) を包括的に解釈するため、言語類型論における Lyons (1967) の主張を導入する。すなわち、[X *be.at* Y] という存在・処格表現は、しばしば所有表現 [X *of* Y] として実現する。言い換えれば、所有者 Y は被所有者 X が存在する場として概念化される。以上の

仮説をもとに、次に挙げる例 (4)、(5) を考える時、次のようなことが言えそうである。

(C) 後置詞 =sa は、それによって焦点化された後置詞句を「ものごとが生じる場＝主題」として提示する。

(4) *e:di angi =sa, ha =kal i: aka-u.*
 person.Ø man.M =GEN 2SG =AFF stomach.Ø suck.Ø-COP.Q
 「若い男は、あなたにしてみれば、胃が袋なのか (=全身胃袋のようだ。)」(バンナ語)

(5) *gurd-a q'et-a =sa, kumma ki =sa paj =mo,*
 village-M small-M =GEN eating.Ø 3M =GEN good =or
e:pi ki =sa sija =m(o).
 cry.Ø 3M =GEN bad =or

「小さな村は、食べるのが良いか、泣くのが悪いかだ。」(バンナ語)

上記の例 (4)、(5) における「ものごとが生じる場＝主題」と「場に存在するものごと」は次のように整理しうる。例 (5) は入れ子構造と見なせる。

ものごとが生じる場	場に存在するものごと	
(4) <i>e:di angi=sa</i> 「若い男の／は」	<i>i: aka-u</i> 「胃が袋か」	
(5) <i>gurd-a q'et-a=sa</i> 「小さな村の／は」	ものごとが生じる場	場に存在するものごと
	<i>ki=sa</i> 「その／は」	<i>paj=mo</i> 「良い、または」
	<i>ki=sa</i> 「その／は」	<i>sija=mo</i> 「悪い、または」

以上の分析にもとづき、仮説 (C) には今のところ大きな瑕疵が無く、それゆえ後置詞 =sa は属格／所有格を表すものであると同時に、統語論的に主題を表す効果を持つと結論づける。

参考文献

Lyons, Lyons (1967) “A Note on Possessive, Existential and Locative Sentences,” *Foundations of Language* 3, 390–396.

Petrollino, Sara (2016) *A Grammar of Hamar*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.

高橋洋成 (2011) 「ハマル語の文例集、および文型の分類」 *Cushitic-Omotc Studies* 2010, 111–137.

高橋洋成 (2010) 「ハマル語の代名詞と後接語体系」 *Cushitic-Omotc Studies* 2009, 131–164.

語釈

1 = first person, 2 = second person, 3 = third person, AFF = affective, COP = copula, GEN = genitive, IMPV = imperative, INF = infinitive, LOC = locative, M = masculine, PL = plural, Q = question, SG = singular, Ø = general form, ‘-’ = morpheme boundary, ‘=’ = bound-form boundary, ‘+’ = free-form boundary

「ウガンダ研修」ことはじめ：地域研究教育プログラムの来し方行く末
梅屋 潔（神戸大学）

**Introduction to the Uganda Training Program: The Past, Present, and Future of
Regional Studies and Anthropology Education**
Kiyoshi UMEYA (Kobe University)

神戸大学国際文化学部（1992 年設置、2017 年募集停止）において実施されていた通称「ウガンダ研修」は、2015 年に初めて実施し、長島信弘（一橋大学・中部大学名誉教授）を顧問に迎えて 2016 年にほぼ原形が定まった。その後組織改編後、国際人間科学部（2017 年設置）では必修科目「GSP 実践型 ポストコロニアルの日常を訪ねて」として、これまでに 2 回実施されている。

試行錯誤の末、以下のコンテンツができてきた。(1)マケレレ大学でのディスカッション：パワーポイントで 5 分から 15 分の英語のプレゼンテーション。アフリカかうガンダ関係で自由にテーマを選んで作成する。マケレレの学生にコメントをもらう。参加するマケレレ大学の学生の選出は先方のカウンターパート任せにせざるを得ないし、学生にバイト代を多少用意したこともあるが、うっかりすると指導教員の懐の中へ入ってしまうなどの問題があった。終了後ゲストハウスでの会食は好評であった。(2)在留邦人のお宅へホームステイ：宿泊費分を現金でお渡しする。ウガンダ人と結婚した方とのネットワークが重要である。在留邦人には比較的好評であるが近年の交通事情悪化により移動が困難になってきた。(3)大使館表敬：私が最も苦手なジャンルだが、最近は平気なふりをするようになった。以前の自分から考えるとこれも奇跡的。歴代大使に好評。(4)ブガンダ王国の文化遺産見学：観光業を生業にするガンダ王国のプリンスの案内による。王国のパーティに招待されたり、王墓にはスムーズに連れて行ってくれるなどのメリットがあるが、不可能なカバカとの面会を取り付けるなど、問題もある。(5)ナイルの源流にボートで：観光業のスタンダードが導入され値上げによる影響が近年大きい。(6)梅屋の調査地 トロロ県グワラグワラでの滞在：最初は村に滞在するのがコンセプト。最終的には 10 日間滞在し、現地の方をグループにわけ、現地語通訳をつけて FGD を実施した。最低限の質問紙は準備したがそれは梅屋の民族誌(梅屋 2018, Umeya 2022) からとった。*jwogi* (死霊)、*lam* (呪詛)、*tipo* (殺されたものの霊)、*rut* (双子) など現地で盛り上がるキーワードをもちこんだ。理論的には、インタビュアーが変われば、内容が変わりうる、という前提に即した追調査の意味を持つ。(7)ACK 邸宅：梅屋の民族誌でもっとも焦点化した大臣の自宅訪問。遺族の協力により実現。たどろろとすれば民族誌との連関をさかのぼって研究できることを目指した。(8)元調査助手の就職先であるワールドビジョンの、開発計画の動いているスポットを見学。信託銀行事業、手に職をつけるための技術訓練所（裁縫と自動車修理）と、頼母子講、養蜂場、集約畜産、新しい農業技術指導などを見学する。(9)ムバレ：有名な観光地、シビ滝訪問他、コーヒー・スタディ・ツアー

が可能。(10)アチョワ村、ソロティーカタクイ：『テソ民族誌』を訪ねる旅、『テソ』に登場する「スティーブン・オウジロット（故人）に会える旅」だった。(11)カラモジャ：マニヤッタ見学。カリモジョンを研究している方ならもっと慎重にアプローチするだろうが、カリモジョンの父親を持つ助手の協力で実現した。オプションとして、(1)長島教授のテソ語講座や、コロニアルな状況を色濃く残す(2)マーチソン国立公園のキャンプとサファリなどが組み込まれた。

結局毎回「これが最後」と言いながら 2015、2016、2018、2023 年にわたり実施してきた。状況によっては 2026 の開催もささやかれている。本報告では、この通称「ウガンダ研修」の成立経緯、様々なトラブルも含めた運営の実際、さらには今後の展望を報告することで、大学におけるとくにアフリカ地域研究／文化人類学教育の困難と可能性を考えたい。

参照文献

梅屋潔（編）2017『ポストコロニアルの日常をたずねて：神戸大学国際文化学部海外研修 2015／2016』神戸大学国際文化学部。

梅屋潔 2017 「アチョワ事件簿：あるいは「テソ民族誌」異聞」『アリーナ』4：328-46。

梅屋潔 2018『福音を説くウィッチ：ウガンダ東部パドラの「災因論」の民族誌』風響社。

Umeya, K 2022 *The Gospel Sounds Like the Witch's Spell: Dealing with Misfortune among the Jopadhola of Eastern Uganda*. Langaa

梅屋潔 2023「実習のレガシー：草創期「地域構想」を回想する」『地域構想学研究教育報告』13：57－63。

長島信弘 1972『テソ民族誌：その世界観の探求』中央公論社。



2016 年 アチョワ村でスティーブン・オウジロットとその息子ダニエル・オチュネと

After the Fieldwork: Reimagining Ethiopia through Coffee and Language

Ohsoon Yun (Visiting Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)

This research explores how coffee-related fieldwork in Ethiopia continues to evolve even after the formal research period ends. Drawing from my long-term engagement with Ethiopian coffee—as a researcher, communicator, and practitioner—I examine how this knowledge is translated and reimagined in Asian contexts. Utilizing tools such as social media, seminars, e-books, and YouTube, I reflect on how narratives of Ethiopia can be reshaped to challenge oversimplified or romanticized representations.

Particular attention is given to the intersection of multilingual communication, visual media, and cultural sensitivity. I propose that digital storytelling and public scholarship are not secondary but central to a renewed research praxis. This 'post-fieldwork' approach expands ethnographic authority from the physical field to translocal and digital spaces—where coffee becomes both medium and message.

Ultimately, this paper invites reflection on how an independent researcher can function as a bridge—connecting regions, disciplines, and publics—through grounded and culturally attentive coffee narratives. In doing so, it contributes to the emerging field of coffee geography, where taste, space, and meaning intersect in powerful and transformative ways.

Keywords: Coffee Geography, Sensory Ethnography, Multilingual Communication, Post-Fieldwork Praxis, African–Asian Circulation

Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究⑨：ウォリソにおける地下足袋製造の挫折

田中利和（事業構想大学院大学）

Engaged Area Studies on Ethio-Tabi Creation: Setbacks in Jikatabi Production in Woliso

Toshikazu Tanaka (The Graduate School of Project Design)

Ethio-Tabi（エチオタビ＝エチオピア地下足袋）の創造に関する実践的地域研究は、開発、普及、事業、芸術をテーマに、多様な人びとと協働しながらフィールドワークを進めてきた。エチオタビを巡る多角的な協働を通じて人びとが共鳴し、ユニークな超学際研究とエチオタビ文化が多様な形で自由に発展することを目指している。一連の試みを動態的かつ内省的に記録・分析することで、協働性と創造性の特徴、そして実践的地域研究の醍醐味を探究している。本研究は、未来へ続く多様な可能性を展望しながら挑戦を続けている。

9年連続となる本学会での発表では、2024年度に農耕文化調査の合間におこなった2度のエチオタビ製造に関するフィールドワークで直面した限界と、それに対する発表者の内省を報告する。調査地はオロミヤ州南西ショワ県ウォリソで、調査期間は1回目が2024年7月31日～8月14日、2回目は首都アディスアベバ市アスコ地区の靴屋での聞き取り調査も含め、2024年12月26日～2025年1月10日に実施した。当初の目的は、ウォリソで地下足袋製造を担う皮革職人カッバラと、日本産アウトソールを用いた地下足袋の試作品を完成させ、製造業としての信頼性を確立することであった。

2024年8月1日、発表者は首都アディスアベバのピアッサ地区にある定宿でカッバラと会流した。老舗地下足袋メーカー丸五から提供されたアウトソールを前に、2週間での現実的な製造可能数を議論した結果、12足のエチオタビを400ドル（1足あたり約33ドル）で製造することに合意した。原材料等を購入する現金不足を理由に、今回は書面契約や第三者を介さず、口約束で400ドルの全額を前払いした。しかし、契約から5日後の8月5日、ウォリソのカッバラの仕事場を訪れると、これまでエチオタビ製造を担当していた右腕の職人はおらず、別の注文に対応していた。エチオタビ製造用の材料も見当たらず、進捗を尋ねても「問題なくできる」と語るのみであった。その後、アディスアベバから新たな職人を呼び寄せたものの、結局、約束の8月14日までにサンプル製品は仕上がらなかった。本人は友人の葬式、自身の病気、技術的な困難を弁明したが、彼の本業における労働力不足と経営状況の悪化はあきらかであった。交渉の結果、エチオタビ製造は4ヶ月後に完成させることで合意したが、日本からの遠隔でのやり取りでは進捗は見られなかった。

約4ヶ月半後の2024年12月31日、カッバラの仕事場を再訪すると、そこは別の店舗に変わっていた。彼は市中心部のビル最上階に場所を移し、「Habu Institute of Fashion Design」というプライベートルールの開設準備に尽力していた。約束のエチオタビは1足も製造され

ていなかった。彼によると、近年材料費と人件費の価格の高騰が激しく、ウォリソでビジネスが難しくなっているという。そのため、これまでの皮革職人としての技術やデザイン経験を活かし、新たに職業訓練のビジネスを始めるとのことだった。将来的にはウォリソでエチオタビ製造の職人を育成するという構想も語られた。彼の主張を踏まえ、エチオタビ協力関係者を交えて、未完成の 12 足の注文分をどのように解決するか会議をおこなった。結果、1 週間後までに可能な限り製造を試み、できない分は返金するという約束になった。しかし、約束の 2025 年 1 月 8 日までに完成したのはわずか 7 足で、しかもそれらは以前のサンプルが混ざっていたり、端切れで作られた低品質なもので、これまでの情熱的な試みや改良が施されていなかった。発表者の契約作法や、カップラの状況に寄り添った交渉の欠如がこのような結果を招いた一因と言える。こうした関係性や実績のもと、製造を無理に継続することの限界を感じた。発表者は、カップラに新たな仕事に集中してもらうため、彼との話し合いの末、エチオタビの協働関係を一旦打ち切ることで合意した。今後、他の職人との協働を試みるという発表者の案にも同意を得た。未製造の 5 足分の残金約 165 ドルについては、職業訓練を希望していた農村部の調査協力者の青年がファッションスクールへの就学を希望したため、その学費に充てることで決着した。

ウォリソ市の人口は 2007 年の調査開始時には 7 万人であったが、近年急激に発展し 20 万人に増加した。かつては見られなかった次世代の靴職人や起業家が街の至る所で新たな仕事を始めている。この挫折を機に、今後は新たな職人探しや育成、起業家との協働を通じて、ウォリソにおけるエチオタビ製造の次なるステージに向けて準備を進める。

2024 年 12 月 26 日、アディスアベバのピアッサ地区にあるバロホテルのマネージャーであるウォリソ出身のファイエラとナガラに地下足袋生産の製造可能性について相談した。その結果、発表者と 17 年来の友人であるナガラの人を介し、3 つのサンプルを 1 足 29 ドルで 3 日間で製造してもらうことができた。2025 年 1 月 11 日、発表者がナガラと共にアスコ地区のサンプル製造工房を訪問したところ、高い技術力を持つ 20 代のウォリソ周辺出身の青年がおり、話を聞くことができた。この発見は、今後のエチオタビの展開を考える上で非常に示唆に富むものであった。

9 年連続で発表してきた「Ethio-Tabi の創造に関する実践的地域研究」は、多くの方々の協力を得て歩を進めてきた。しかし今こそ立ち止まり、エチオタビとは何かをさらに考える必要がある時期に来ている。最後に、今後の展望を述べる。

ダボとアンバシャ：エチオピアのキリスト教徒の2種の小麦パンに関する歴史学研究

石川博樹（東京外国語大学）

Dabo and Ambasha : A Historical Study on Two Types of Wheat Bread of the Ethiopian Christians

Hiroki Ishikawa (Tokyo University of Foreign Studies)

1990年代以降「エチオピア料理」に関する書籍の出版が増加する。これらの料理書に掲載されている食品・飲料の多くは、エチオピアの中央部から北西部にかけて居住する「エチオピアのキリスト教徒」（アムハラ語話者のアムハラとティグリニャ語話者のティグライ）のものである。これらの料理書において、パンの筆頭に挙げられているのは、酸味のあるパンケーキ状のインジェラ（አንጅራ / *ənṅära* / injera）であり、続いて「ダボ（ዳቦ / *dabbo* / dabo）」、3番目に「アンバシャ（አምባሻ / *ambaša* / ambasha）」が取り上げられることが多い。インジェラが液状生地で作られるに対し、ダボとアンバシャはパン生地で作られる。ダボもアンバシャも主に小麦で作られるが、ダボはアンバシャよりも厚みがあり、アンバシャはしばしば生地の表面に切り込みをいれて装飾が施されることが特徴である。

しかし19世紀の各種史料では、インジェラ、ダボ、アンバシャが同時に列挙されることはない。そして英国聖公会宣教協会の宣教師イゼンベルグ（C. W. Isenberg）が1841年に出版したアムハラ語辞書には、ダボという語の語義の1つとして「エチオピア中央部のショア（ሻዋ / *Šäwa* / Shoa）地方におけるアンバシャに対する呼称」という説明が見える（Isenberg 1841: 165）。

本発表では、1840年代から20世紀前半にかけての各種史料におけるダボとアンバシャに関する記述を検討することにより、ダボとアンバシャがインジェラとともにエチオピアのキリスト教徒の主要なパンとして列挙されるようになった時期を明らかにする。

検討の結果得られた主な結果は以下のとおりである。

- ①イゼンベルグはダボの語義の1つとして「アンバシャの別称」という意味を記しているが、他に同様の記述は見られない。ダボもアンバシャも主に小麦で作られるパンであり、イゼンベルグは「小麦パン」という共通点で両者を同義語とみなした可能性が高い。
- ②イゼンベルグはダボという語のもう1つの語義として、「ティグライ地方における小麦パンの一種」と記している。ドイツ人植物学者シンペル（G. W. Schimper）が1860年代にティグライ地方で行った調査の記録にも、同地方の一部で「焼くというより蒸して作られる球状のパン」である「ダッボ（Dabbo）」が作られていたことが記載されている（Schimper 2015: fol. 141rv）。しかしその後このタイプのダボは史料に現れなくなる。
- ③エリトリアは1892年にイタリアの植民地となった。1890年代半ばから出版されるようになったティグリニャ語の辞書や語彙集においてイタリア語の「パン（pane）」にあたる

語として挙げられているのは、インジェラと「ヒンバシャ (አምባሻ / ḥambaša / himbasha)」(アムハラ語のアンバシヤに相当するティグリニヤ語の単語) であった。

- ④ ショア地方では、1840 年代には小麦でつくられるダボは富裕層の食べるパンであった。その後 19 世紀第 4 四半世紀の各種史料では、液状生地で作られるインジェラとパン生地で作られるダボが同地方の主要なパンとして言及されるようになる (石川 2025)。
- ⑤ 初のアムハラ語小説を執筆したことで知られるアフワルク (Afäwäraq Gäbrä Iyäsus) が 1905 年に出版したアムハラ語文法書では、アンバシヤは「フォカッチャ (pane focaccia)」と訳され、「ティグライのもの (tigrino)」と説明されている (Afevork 1905: 44)。
- ⑥ ラザリスト会の宣教師バエトマン (J.-É. Baeteman) が 1929 年に出版したアムハラ語辞書では、ダボという語は「多くの場合半球状の小麦パン」および「ヨーロッパ人のパン職人が焼いたパン」と説明され、また「小さなダボ (petit “dabbo”)」「ダボ・タイプのパン (pain genre “dabbo”)」として 7 つのパンの名称が掲載されている。その一方でアンバシヤという語は、他のパンと混同した説明がされている (Baeteman 1929: 666–667, 941)。
- ⑦ 1950 年代前半に刊行された『メネン皇后学校料理書 (The Empress Menan School Cook Book)』には、インジェラとともに「デフォ・ダボ (ደፎ ዳቦ / dəfo dabbo / defo dabo)」およびアンバシヤのレシピが掲載されている (Sənəddu et al. 1953 / 1954: 23–24, 55–56, 60)。

これらの結果から、19 世紀末までに、ティグライ地方ではインジェラとアンバシヤ、ショア地方ではインジェラとダボが主要なパンとなっていたこと、エチオピア帝国の中心地となったショア地方のアムハラがその後アンバシヤを取り込むことによって、1950 年代前半までにインジェラ、ダボ、アンバシヤがエチオピアのキリスト教徒の主要なパンとして列挙されるようになった可能性が高いことが判明した。

【引用文献】

- 石川博樹 (2025) 「19 世紀中葉のエチオピアのショア地方におけるパンをめぐる変化とその背景」『アフリカ研究』107: 27–38.
- Afevork, Ghevre Jesus (1905) *Grammatica della lingua amarica: Metodo pratico per l'insegnamento*, Roma: Tipografia della R. Accademia dei Lincei.
- Baeteman, Joseph-Émile (1929) *Dictionnaire amarigna-français, suivi d'un vocabulaire français-amarigna*, Dire-Daoua: Imprimerie Saint Lazare des rr. pp. Capucins.
- Isenberg, Carl Wilhelm (1841) *Dictionary of the Amharic Language. In Two Parts. Amharic and English, and English and Amharic*, London: The Church Missionary Society.
- Schimper, Georg Wilhelm (2015) “In Abyssinia. Observations on Tigre.” Accessed June 27, 2025. <http://exist.ghil.ac.uk: 8079/Schimper/>.
- Sənəddu Gäbru et al. (1953 / 1954) *The Empress Menan School Cook Book*, Addis Ababa: Ministry of Education.

エチオピア・オロミア州の中世サカテ遺跡の構成要素の検討：現地踏査および衛星画像分析から探る遺跡概要

遠藤仁（東京外国語大学）・渡邊三津子（文教大学）・大場千景（アルシ大学）

Research on the Components of the Medieval Sakate site in the Oromia Region, Ethiopia: Overview of the site through field survey and satellite image analysis

ENDO Hitoshi (Tokyo University of Foreign Studies), WATANABE Mitsuko (Bunkyo University), OBA Chikage (Arsi University)

東アフリカは、アジア地域と地中海沿岸地域を結ぶインド洋航路の中継地点として、古代から流通の一端を担ってきた。内陸部であるエチオピア高原もその交易路の一部であり、主に中世においてジプチから内陸部へと続く大地溝帯沿いにいくつかの遺跡の存在が知られている（Insoll 2023）。本研究は、エチオピア・オロミア州西ハラルゲ県を対象に 2023 年に行った中世遺跡の分布調査（Endo & Oba 2024）の過程で確認した、当時の主要交易路と目される大地溝帯ではなく、その南の丘陵地帯に立地するサカテ（Sakate）遺跡（図 1）に着目し、その遺跡の構成要素に関して検討する。

上記分布調査では、西ハラルゲ県およびその周辺の遺跡群はすべてイスラーム教徒が居住していた痕跡を残していた。この一帯にはその他にも、世界遺産である城塞都市ハラール（Harar）や、世界遺産暫定リストに掲載されているシェイフ・フセイン廟（Sheik Hussein）など周知のイスラーム関連遺跡もあり（図 1）、中世にこの地域でイスラーム教徒が広く交易活動に関わっていたことが窺える。その中でもサカテ遺跡は、分布調査において新規に確認された未知の遺跡であるが、その規模はハラール遺跡に匹敵する規模と推測される。現状で踏査による概要の確認のみで、遺跡全体の詳細な踏査や測量、発掘調査を実施できていないが、以下確認できている情報から遺跡の性格を検討する。

サカテ遺跡は、1 辺 30m の石壁のみが遺存する正方形のモスク跡（図 3）とそれを囲う 1 辺 50m の周壁からなる巨大なモスクを中核とする集落、もしくは都市遺跡であると考えられる。遺跡の範囲内には遺構群を囲うように石を積み上げ、場

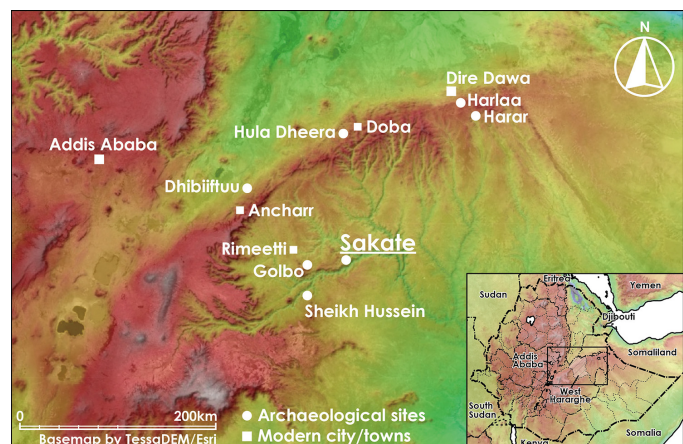


図 1 オロミア州西ハラルゲ県周辺の中世遺跡（筆者作成）

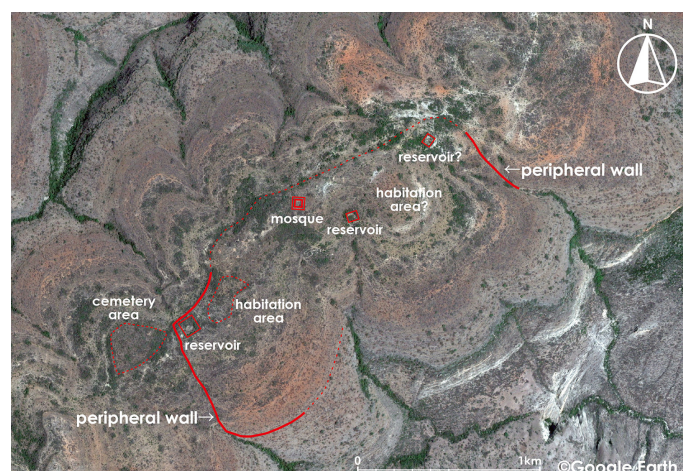


図 2 サカテ遺跡の概要（Endo & Oba 2024 を改変）

所によっては 2m 以上の高さを有する周壁が断続的に確認でき、長い場所で 700m 以上におよぶ (図 2 の赤い実線)。周壁内には約 20m 四方の土塁で囲われた貯水槽と考えられる遺構が 3 か所あり、住居址と見られる石列群が複数確認できている。住居址は図 2 に示した箇所以外も分布していると思われるが、前回踏査時は雨季中で植生が多い状況下であったため確認できていない。周壁外の西側には墓域と考えられる場所もあり、近隣の村人によると過去に盗掘により近世の指輪が得られたという (実物を確認済み)。これらの遺構群の存在、特に遺跡を囲う周壁は人ないし野生動物からの防御施設と考えられ、複数の貯水槽の存在は生活用水だけではなく周壁内で農業ないし牧畜を行っていた可能性がある。以上からサカテ遺跡は相当数の人口を抱えた、拠点的な居住遺跡であったと考えられる。その帰属時期は、遺跡範囲内には広く土器片や石製遺物が落ちており、いくつかを表面採集し実測して、既に T. Insoll 等により発掘調査が行われているハルラー (Harlaa) 遺跡の出土土器の実測図 (Tait & Insoll 2021) と比較検討した。サカテ遺跡の分析対象土器は少なく限定的ではあるが、ハルラー遺跡の 11~15 世紀とされる資料群と類似点が見られるため、サカテ遺跡の帰属時期も同様であると考えられる (Endo & Oba 2024)。また、モスクの構造等からも北アフリカや東アフリカの中世モスクと対比は可能であるため、建築史の視点からも分析を進めていく。今後発掘調査が実施できれば、遺物や炭化物等の分析から、より詳細な時期の特定は可能であると考えられる。

サカテ遺跡は、2023 年に 1 度踏査したのみで、追跡調査は 20225 年中に予定しているが未だ実施できていない。そのため、調査計画の策定とともに衛星画像解析も同時に進めている。Google Earth や ALOS World 3D の複数時期の画像解析により、踏査時には認識できなかった遺跡を囲う周壁の一部や貯水槽 1 か所、サカテ遺跡周辺で遺跡の可能性のある場所を確認しており、今後より高解像度の衛星画像を入手し、詳細な現地調査を行う場所を選定していく予定である。また、現地では一部植生により遺構が破壊されている状況も確認できているため、入手可能な最も古い衛星画像である 1983 年の衛星画像 (Hexagon) を取得し、ここ数十年の遺跡の変化も確認している。



図 3 サカテ遺跡のモスク跡南側正面入り口立面写真 (筆者作成)

参考文献

- Endo, H. and C. Oba 2024 Anthropological and Archaeological Survey of the Harla Related Medieval Sites in West Hararghe Zone, Oromia Region, Ethiopia, *Journal of Nilo-Ethiopian Studies* 29: 1–11.
- Insoll, T. 2023 Archaeological Perspectives on Contacts between Cairo and Eastern Ethiopia in the 12th to 15th Centuries, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 66: 154–205.

Tait, N. and T. Insoll 2021 Local Ceramics from the Islamic Trade Center of Harlaa, Eastern Ethiopia: Markers of Chronology and Contacts, *African Archaeological Review* 38: 419–442.

第34回日本ナイル・エチオピア学会学術大会事務局：曾我 亨

大会事務局連絡先：〒036-8560 弘前市文京町 1 番地

弘前大学

Secretariat of the 34th Annual Conference for JANES

Toru SOGA,

Hirosaki University 1 Bunkyo-cho, Hirosaki 036-8650.